

リルケの詩「精霊アリエル」について

小松崎 直

一九一〇年に「マルテの手記」(Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Briegge)を完成して以後の詩人リルケが極めて深刻な沈鬱状態にあったことは、例えばルー・アンドレアス・ザロメ宛の一九一一年十二月二十八日付の書簡に見られるとおりである。「お分り頂けるでしょうか。私はこの書(＝マルテの手記)のあとに正に敗残者のように取り残されてしまっています。心の中では途方に暮れ、仕事もせずに、最早仕事をすることも出来ずに。この書を終りへと書き進めていきながら、私は段々強くこの書が筆舌には、尽くし難い一巻になるのではないか、いつも自分に言いかせていた言葉を使えば、高い分水嶺になるのではな

いかと感じないではいられませんでした。けれども今、はつきり分ったことなのですが、水はすべて以前の側へ流れ落ちて行ってしまい、私は変哲もない不毛の地へ降りて行っているのです。それだけならばまだよいのですが、もう一方の、没落した男が、何やかやと私を消耗させてしまい、私の生命のいろいろな力や対象をその没落のために甚だしく浪費してしまつたのです。ですから彼がその手にもたなかつたもの、その心に抱かなかつたものはなにもないのです。彼はその絶望の激しさで一切を自分のものにしてしまいました。或る物が私の眼に新しいものに見えるや否や、私はもうそこに亀裂を、彼が身をふりほどいた地肌の

見える場所を見出すのです。……………

もう殆ど二年になります。ルー、あなただけは、私がこの年月をどんなに偽った、みじめな費し方をしてきたか分かって下さるでしょう。」

幾度も危機を体験したこの詩人の生涯に於いてもこれはおそらく最も深刻なものであつたらう。あたかも自らを避けるように、世間を、芸術を避けるように彼は転々と居住の場を変えていった。イタリア、パリ、ボヘミア、アルジエ、エジプト、オーストリア、スペイン。そして芸術と生活との間に絶望的な乖離を感じた孤独な近代人たるリルケはそれまで意識的に自らに近づけることのなかつた、あるいは識るところのなかつた偉大な文学に接して、そこに助言、助力を求めぬに至る。長いこと遠ざけていたゲーテを再び読みはじめ、ヘルダーリン、クライスト、ビューヒナーを発見し、ゲオルゲのサークルと接触する。スペインから彼は出版者キッペンベルクにシュティフターを求める手紙を送り、キッペンベルクはさらにホーフマンスタールを数冊詩人に贈るのである。リルケのシェイクスピアに対する接近もこの出版者夫妻を通じて行なわれるのである。一九一一年六月二十三日付でリルケはキッペンベルクに次の

ように書く。「シェイクスピアを数冊、真に決定的な数冊を御配慮願えれば、と思います。きつと最上の翻訳をお持ちのことでしょう。私がどの巻から手をつけるべきか、御熟考頂きたく存じます。」この一週間後、つまり、一九一一年六月三十日に出版者の夫人であるカタリーナはリルケのシェイクスピアへの関心を非常に喜び、翻訳は出版されればかりのグンドルフのものよりも、古いシュレーゲル・ティークのものに決めたと言いながら、どの作品を薦めるべきかについては、ハムレット、マクベス、リア王の名を挙げてから次のように記す。「お氣持を楽になさりたいのでしたら「ヴェニスの商人」。第五幕のはじまりはとても魅惑的です。或いは「あらし」。もうはつきりと記憶しているとは言えませんが、これ程甘美な、まるで翼でも生えているような作品は他にはなかつたという印象は今なお残っています。」このような手紙が往復して約一年半の後のスペイン旅行中に、つまりドゥイノに於いて悲歌が書き始められてから後に精霊アリエルと題された一つの詩が生まれる。

DER GEIST ARIEL

(Nach der Lesung von Shakespeares Sturm)

Man hat ihn einmal irgendwo befreit

mit jenem Ruck, mit dem man sich als Jüngling
ans Große hinriß, weg von jeder Rücksicht.

Da ward er willens, sich : und seither dient er,
nach jeder Tat gefaßt auf seine Freiheit.

Und halb sehr herrisch, halb beinahe verschämt,
bring' mans ihm vor, daß man für dies und dies
ihn weiter brauche, ach, und muß es sagen,
was a man ihm half. Und dennoch fühlt man selbst,

wie alles das, was man mit ihm zurückhält,
fehlt in der Luft. Verführend fast und süß :

ihn hinzulassen——, um dann, nicht mehr
zaubernd,

ins Schicksal eingelassen wie die andern,
zu wissen, daß sich seine leichte Freundschaft,

jetzt ohne Spannung, nirgends mehr verpflichtet,
ein Überschuß zu dieses Atmens Raum,

gedankenlos im Element beschäftigt.
Abhängig fürder, länger nicht begabt,

den dumpfen Mund zu jenem Ruf zu formen,

auf den, er stürzte. Machtlos, alternd, arm

und doch ihn atmend wie unfäßlich weit
verteilten Duft, der erst das Unsichtbare

vollzählig macht. Aufsäheind, daß man dem
so winken durfte, in so großen Umgang

so leicht gewöhnt. Aufweinend vielleicht auch,
wenn man bedenkt, wie's einen liebte und

fortwollte, beides, immer ganz in Einem.

(Ließ ich es schon ? Nun schreckt mich dieser
Mann,

der wieder Herzog wird. Wie er sich sanft
den Draht ins Haupt zieht und sich zu den

anderen

Figuren hängt und künftighin das Spiel

um Milde bitter.....Welcher Epilog

vollbrachter Herrschaft. Abtun, bloßes Dastehn

mit nichts als eigner Kraft : » und das ist wenig. ☹

精霊アリエル

(シェイクスピアの「あらし」を読んで)

あるとき どこかで ひとは彼を自由にした
ひとが若いとき なにもものにもとらわれずに
偉大なものに心奪われていったあのひとつきで。
すると彼は従順になり。見よそれからの彼は奉仕
するのであった

仕事のあとでは常に自分の自由を期待しながら。

そしてなかばはごく尊大に なかばは殆ど羞じらいな
がら

ひとは彼に言いつける これこれのことにまだ彼が必
要なのだ ああ そして言わなければならぬ
のだ

彼を助けてやったことを。にもかかわらずひとは感じ
ていた

彼とともに自分がひきとめていたすべてのものが
空中に欠けていることを。殆ど誘惑に近い甘美なおも
いだった

彼を行かせてやり——そしてそれからはもう魔法を行
なわず

他のひとびとと同じように運命の中へ組み入れられて
自分の軽やかな友情が

今や緊張を失って どこにもはや束縛されずに

この呼吸する空間には余計なもので

無心に原素のなかで働いているのだと知ることは。

それからは独立する力を失い もはや

重苦しい口を開いて それを聞いたら彼が飛んでくる

叫びを

挙げることも出来ない。力無く、年老い、みじめでは

あるが

彼をまるで不可思議な程遠くへまき散らした香りのよ

うに

目に見えぬものをはじめて完全に

あの香りのように呼吸している。ひとが彼に

あのように会図が出来、あれ程偉大なつき合いに

あれ程容易になれていたことに微笑みながら。またお

そらくは

それがひとを愛しながら、離れたがっていたこと

この二つを常に全く同時に求めていたことを思っ

泣きながら。

(私はそれをもう手放したのだろうか？ いま私はこの男に驚く)

この再び大公となる男に。何とやさしく彼は

針金を頭に差し込み 他的人物達と

立ちならび その後は芝居に

寛容を願っていることか……成就された支配の

何という結末であろう。すべてを放棄してただそこに

「わずかなものである」自分の力だけで立っている。」

セヴィラに幻滅を感じてから赴くロンダに於いても詩人自身の内部には解決をせまられている問題が大きな位置を占めていた。「なにかは分らないのですが、またずっしりと重く心にのしかかるものがあります。……究極的に存在するものへと一層関与してゆく道を歩みたいと思います。」(一九二二年十二月十九日のルー・アンドレアス・ザロメ宛書簡)

「私はどうしてもこれらの不快の原因を究めなければなりません。……私はここで一変しなければなりません。そうで根本的に変化しなければなりません。でないと思界のすべての不可思議が無駄になってしまいます。」(一九二二年十二月十七日のマリー・トゥルン・ウント・タクシス侯夫

人宛書簡)「あらし」との対話から一九一三年の初頭に書き上げられたこの詩も当然この問題にかかわっていなくてはなるまい。

詩は二つの部分に分かれる。全体の大部分を占める具体的なプロスペロ・アリエルの関係をめぐる部分と個人的モノローグの如き、かっこに入れられた部分とである。リルケは魔術師プロスペロの大氣の精アリエルに対するこまやかな心遣いから始める。そして罪と許しの問題、恩寵的な和解行為については全く言及していない。接近して来たリルケに対するシェイクスピアの解答はこのようなものであった。リルケが魅せられたのは、大氣の精アリエルと、そのプロスペロへの拘束とによってであり、詩を一貫する流れは、自由と隷屬、支配と服従ということなのである。

「あるとき どこかで ひとは彼を自由にした」この唐突な導入はプロスペロが苦しんでいるアリエルを自由にしてやったことなのだが、不定代名詞“man”を用いることによってリルケは「あらし」という特定の状況を超え出ているのである。どこにもプロスペロという固有名詞は用いられていない。そして同時にアリエルが救い出されるのは、引き裂かれた松の木からではなく、「どこかで」な

のである。したがってこのアリエルの解放とは、別の意味を、またそれ故単に字義のみにとどまらない意味を有するのである。果してそれに続く二行はシェイクスピアの場ではない。“ひとが若いとき、なにものにもとらわれずに偉大なものに心奪われていったあのひとつきで”。シェイクスピアのプロスペローが島にたどりついたときは、男盛り、すでに名望ある大公であった。アリエルを自由にするとすることは偉大なものに心奪われるということなのである。そしてこのようなことを行なうのは青年なのだが、この青年とは誰なのか。リルケの詩によく登場する英雄？あるいは詩人？ここでは詩人と考えねばなるまい。というの、詩の結末でプロスペローの問題を提出しているのは詩人であるリルケに他ならぬ訳なのだから。

精霊アリエルと同じ年に書かれた散文“若い詩人について”(Über den jungen Dichter)の中でリルケは詩作する力は青年の内部に突然姿を現わすと書く。生が初めて圧倒的な力を持ち始める成育しつつある人間というのはこの詩人が好んでとり上げるテーマだが、それがここに姿を変えて登場している。“いくさやかな日常の中に、さまざま現代都市において、誠実に仕事にはげむ家の中で、乗物

や工場の騒音のもとで、つまりあらゆることにとらわれているときに突如として、また間断なく、未だ成長しきらない青年の心の中に巨人が登場し、もろもろの原素がその限りない彼の心の中へ侵入するのである”(若き詩人への手紙)この“もろもろの原素”と空気の精アリエルとは密接に結びついているのである。同じ散文の中でリルケが“彼の内部に巨大なものが発生する。驚嘆の思いとともに見知った空間の分だけ彼の心はさらに豊かになるかも知れない”或いは“突然彼の中に住みつく力がまだ至るところでためらっている幼なさに親しみを感じ、つき合いをはじめ”とさらに筆を進めているのはこのことを裏付ける。同じく一九一三年にスペインに於いてリルケはドウイノでの体験を“体験(Briefe)”と題する散文に書き上げるがその中には“彼は灌木状の木のほほ肩の高さのふたまたのところにもたれかかるとすぐにこの姿勢に心地よく体が支えられているのを感じ……自然に完全に身をまかせきった。”そして“自然の向う側に出ってしまったのだ、とひとりごとを言った。”この自然の向う側に出ってしまったという考えがリルケの心を離れない。さらに“体験”は次のように続けられる。“幼いころから大気の原初的な威力、水の澄み

わたった、様々なたたずまい、雲に感じられる英雄的な運
行などが彼の心をこの上なくとらえた。……彼と人々との
間にはそつと隔てるものがあつた。原素という永遠の存
在に代つて自然の向う側に立ち現われ、若き詩人の心を奪
つたのは空気の精アリエルなのである。すると彼は従順
になり 見よ それからの彼は奉仕するのであつた。な
にものにもとられなくなつた詩人は精霊アリエルを自由
にし、呼び寄せたのであつた。この精と詩人は同じ世界に
住み、且つ彼はこの精に奉仕させる力を有する者になつた
のである。これより一年前に書かれた散文「詩人について
(Über den Dichter)」の中でリルケは詩人を「魔術師」と
呼ぶのだが、プロスペローは魔法を行いながらも彼に従順
に奉仕するアリエルの助けを必要としているのである。も
ちろん「仕事のあとでは常に自分の自由を期待しながら」。
再び「自由」が現われるのだが今度は「どこか」から自由
にはなく、魔術師プロスペローの自発的な奉仕からの自
由なのである。この詩のテーマは偉大なものへ心奪われる
ことではなく、「自然の向う側」を魔術的支配から自由に
することなのである。

「そしてなかばはごく尊大に なかばは殆ど羞じらいな

がら」。プロスペローのアリエルに奉仕を要求する一つの
態度である。「尊大に」であるのは彼が魔法を行なうのに
アリエルが必要になつて「助けてやつたことを」言わねば
ならないからであり、「羞じらいながら」であるのは「彼
とともに自分がひきとめていたすべてのものが空中に欠け
ている」ことを彼自身感じるからである。精霊を支配する
ことは過誤を犯す可能性をも示すわけである。元来アリエ
ルは自由の身であるわけであるし、無限の空間、目に見え
ぬ世界に住むものであつて、それを意のままにすることは
人間、芸術家にふさわしいこととは言えぬものであるから
である。精霊の力を借りることであつても、魔法を行なう
ということは人間に定められた限界を踏みこえることであ
り、大気という原素の中にひそむ無限の存在への不当な侵
害なのである。

「殆ど誘惑に近い 甘美なおもいだつた……」。彼を行か
せてやり、もはや魔法を行なわず、他のひとびとと同じよ
うに運命の中へ組み入れられるということは人間の世界へ
と転向して、魔術を行なう力を放棄するということであ
る。アリエルを自由にすることが、「殆ど誘惑に近い甘美な
おもい」であるのはその意味するものがアリエルを喪失す

ることではなく、変身させることであるからである。両者の関係は支配と奉仕の緊張から、どこにもはや束縛されない「軽やかな友情」へと変るのである。精霊はおのれの大気圏へと帰り、「無心に」「原素の中で」「働くのである。もちろん詩人にとつての意味は人間世界への、苛酷な現実世界への、普遍的な運命への隷属への退行を意味する。彼は魔力の放棄を要求され、力無くどどまるのである。

これに続く詩句は再び自己放棄をしたもののみが体験し得る充溢の世界を描き出す。「彼をまるで不可思議な程遠くへまき散らした香りのように 目に見えぬものをはじめて完全にする あの香りのように呼吸している」。こうしてはじめて人間は目に見えぬものへの純粋な連関を勝ち得るのである。奉仕を要求し、それを利用するというのではなく、再び純粋なそれ自身の存在となり、再び完全なものたり得た大気の精を彼は呼吸するのである。転向の後でもなおアリエルに対する二つの態度は続くのである。「それからは独立する力を失い……力無く、年老い……」。これは先の尊大に精霊を所有することに対応し、「ひとが彼に……に微笑みながら。またおそらくはそれがひとを愛しながら……を思つては泣きながら」。これは同じく羞じらい

ながらのつき合いが姿を変えて現われたものである。

かっこに入れられたこの詩のエピソードで詩人は自らにプロスペローの問題を投げかける。「私はそれを既に手放したのだろうか」「つまり私はアリエルを去らせることが出来たのだろうか。私は転向に成功したのだろうか。詩人は自らに冷静に問いかけるのである。「ひと」という一般化された代名詞ではなく、「ふたたび大公となる男」、プロスペローの姿が明確に浮び上がらせられるのである。詩の一部では詩人は魔術師プロスペローの姿と重なり合っているように見えたのだが、ここではつつましい転向に成功した男と対峙するのである。それゆえにこの男は彼を驚かすのである。仮借なく現実を侵入させることによつて彼を驚かすのである。要求するものはあくまでも大きく、それを行なうのは困難を極める。というのは彼が詩人に要求するものは「自然の向う側」からこちらで出会つた事物を支配する力の放棄であるからである。つまりパリ時代の事物詩も現実的なものを究極的に、真に放棄してはいないのである。また事物への没入、その内部へ視ながら没入するということとは明らかに魔術を我がものとすることの一つの形式であつたわけである。一九一四年にパリで書かれた詩「転

向 (Wendung) はその題そのものが、また題辭として置かれてゐるカスナーの「誠実から偉大に至る道は犠牲を通る」という言葉がアリエルの詩との関連を予想させる。詩人はこの詩の中では旅人、見る人の姿をとって現われる。そして異郷の旅籠屋の部屋の中で待つ人として彼は苦惱するのである。

.....

すると話がなされた。空中で

不可思議に話がなされた

彼の感じられる心について

彼の苦惱で埋めつくされた肉体を通しても

なお感じられる心について

話がなされ、裁きが行なわれた

その心には愛がない と

(そして、それ以上彼に身を捧げることが拒んだ)

なぜなら見ることには 見よ 限界があるからだ

そして見られた世界は

愛の中で栄えたいと願うからだ

もはや眼の仕事はなされた

いまや心の仕事をせよ

お前の中の姿によって ああ捕われたものの姿によつ

て なぜなら

お前はそれらを捕えながらも 知ってはいないからだ

世界や姿との見るといふつき合い方がこの詩の中ではものを征服し、捕えておくこととして現われる。先に引用した散文「体験」の中にも同じ方向を示す箇所がある。つまりリルケにとつて詩人とは「人々との間にはそつと分け隔てるものがある存在」なのである。そして「彼はまたどれ程深く人々の心に彼の孤独が印象づけられたかを知らなかつた。彼自身について言えば、この孤独がはじめて彼に人々に対するある種の自由さを与えていたのであつた。この貧困のささやかなはじめはそれだけ彼の身を軽くしたが、同時にそれは彼に互いに期待し合つたり、心配し合つたりしている人々、死と生にとらわれている人々の間にあつて独自の敏捷さを与えていたのであつた。彼等の重さと自分の軽さとを比較しようという気持はまだ彼の中にあつ

た。そういうことをすれば彼は彼等を感じてしまふのだということはよく知ってはいたのだが。彼が彼なりの克服に到達したのは、英雄のように人間同志の束縛の、その心の重苦しい空気の中心ではなく、彼等ならば「空虚」としか呼び得ないような、人間的な要素を殆ど失った、戸外の空間でだということを知り得るものではなかったのだから。人々の世界の、さまざまな束縛の中に姿を現わすことというのはシェイクスピアの「あらし」の中でプロスペローが行なうことに他ならない。

……何とやさしく彼は

針金を頭に差し込み 他の人物達と

立ちならび その後は芝居に

寛容を願っていることか……成就された支配の

何という結末であろう。すべてを放棄してただそこに

「わずかなものである」自分の力だけで立っている。

詩の結尾部は詩人リルケの「あらし」との対話の総括であり、またシェイクスピアのエピローグのリルケへの投影である。精霊の魔力を持たずに他の人々と異なるところのない運命の中へ転向し、首肯することがはじめて「成就された支配」となるのである。それが「すべてを放棄してた

だそこに「わずかなものである」自分の力だけで立っている」ことなのである。シェイクスピアでは「残る力は自分のもので／微々たるものでございます」（豊田実訳）となっている。プロスペローは人々の裁断を求め、彼等にその機会を与えているわけである。彼は最早運命劇の監督ではなくなり、自ら共演者として劇の中で他の共演者と観客の寛容に呼びかけるのである。

シェイクスピアのエピローグにはまたキリスト教の恩寵があらわれる。「祈りによって助けられねば、／祈りは神の御座にも達し／人を罪から解放します。（上に同じ）リルケにこのモチーフは全くない。リルケにあらわれるのは人生という仮借なき人形芝居の姿である。ここでやさしく針金を頭に差し込む動作に荊冠が暗示されていると解してはならないであろう。まさにこの詩の成立した時期の、先に引用した一九一二年十二月十七日のタクシス侯夫人宛書簡にはさらに「私はコルドバ以来殆ど狂熱的な程の反キリスト精神を抱いています。」と記しているのである。リルケはこの時期にはコーランを読んでいた。ここで想起せねばならないのはむしろ一九一五年十一月にミュンヒェンで成立したドウィノ悲歌第四であろう。

私はこの半ばしかつまっていない仮面は好きではない
むしろ人形が好きだ。これは充ちている 私は
胴体に堪え 針金と外観だけの顔に
堪えてゆこう。

ここでの関係は人形と天使との間で行なわれる。「天使
と人形 それでやっつと演劇が出来あがる」(第四悲歌)わけ
なのである。姿をかくしてしまった舞台監督にかわって針
金で胴体を高く吊り上げるのは天使なのである。この二つ
の個所の何れに於いても針金を通された人物によって人間
にはもはや意のままにできない、優れた演劇が行なわれる
ために舞台監督は身をかくすのである。

詩の最後の部分は響きを強めながらシェイクスピアのヘ
ピローグを引用するわけだが、シェイクスピアの「わすか
なもの」が文字どおり自らの弱力を示すのに対してリル
ケの「わすかなものである」自分の力「は更に転向、放
棄を示す意味がかくされていることは読みとられるべきで
あろう。その求めることは如何にも微々たるものでこの転
向だけなのだが、これこそがそれ以上求むべくもない一切
なのである。

リルケは自らの苦悩から生れたこの対話の詩の中で転向

への呼びかけは余すところなく表わし得たといえるだろ
う。しかし彼の緊張は未解決のまままでドライノの悲歌に至
るまで残るのである。

【テキスト】

R. M. Rilke: *Sämtliche Werke* Bd. I. II. VI. Frankfurt
a. M. 1955.

【書簡】

R. M. Rilke, L. Andreas-Salome: *Briefwechsel* Frank-
furt a. M. 1975.

R. M. Rilke, K. Kippenberg: *Briefwechsel* Wiesbaden
1954.

R. M. Rilke, Marie von Thurn und Taxis: *Briefwech-
sel* Bd. I. Zurich 1951.

R. M. Rilke: *Briefe an seinen Verleger* Bd. I. Wies-
baden 1949.

【文献】

H. J. Schrimpf: *Der Geist Ariel* (in "Die Deutsche Lyrik
Bd II") Düsseldorf 1962.

U. Fülleborn: *Das Strukturproblem in der späten Lyrik
Rilkes* Heidelberg 1973.

W. L. Graff: Rainer Maria Rilke Creative Anguish of
a Modern Poet Princeton 1956.

E. C. Mason: Rilke, Europe, and the English-Speaking
World London 1961.

手塚富雄：ゲオルゲとリルケの研究 東京 一九五五。